

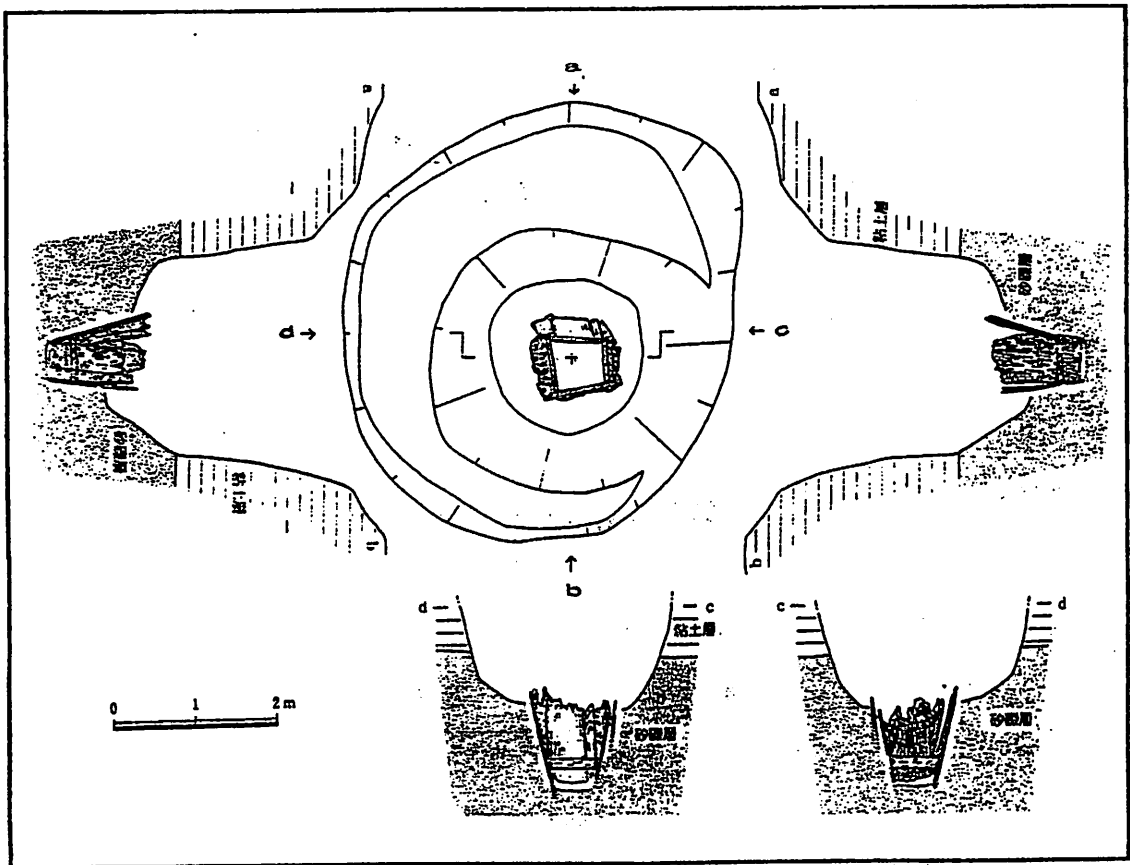
第83号 通巻15巻 第4号
1995年12月1日 発行

守山市立埋蔵文化財センター
☎0775-85-4397

〒524-02
守山市服部町2250番地

☆ 弥生中期の井戸を発見 ☆

環壕集落の二ノ畦・横枕遺跡から木組枠を伴う弥生時代中期の井戸がみつかりました。井戸は直径3.7m、深さ2.9mの素掘穴が掘られていて、最深部に四角く組まれた木枠が残っていました。木枠は縦板が16枚打ち込まれていて、内側に倒れてこないように4本の横棧で固定されていました。弥生時代の井戸は、素掘りか丸太をくりぬいたものを井戸底にはめるものが一般的で、今回の木組井戸は、最も古い時期のものとして大変めずらしい発見といえます。また木枠に使用されていた2枚の板材（スギとヒノキ）の年輪を調べた結果、ともに紀元前97年に伐採されたことが判明し（年輪年代学）、集落が営まれていた年代を考える上で、きわめて重要な成果だといえます。



☆ 発掘調査だより ☆

SSS SSS SSS 調査終了 SSS SSS SSS

1. 赤野井遺跡

調査地 十二里町字畑合659番地他
 調査面積 約 400 m²
 調査期間 10月17日～11月8日
 調査実施の理由 道路建設

赤野井遺跡は弥生時代から平安時代にかけての集落跡として県内でも有名です。特に奈良時代の多数の建物跡をはじめ、墨書土器（土器に墨で「大田」「瓦」「内」「大」と書かれたもの）やヘラ描き土器（土器にヘラで「赤見」「大吉」「正丁」と描かれたもの）が出土したことから赤野井遺跡を野洲郡七郷のひとつである明見郷の役所跡とする考え方が有力になりました。今回の調査地点は赤野井遺跡の南側の水田地で、4m幅で長さ約100mにわたって調査しました。この調査では古墳時代前期の井戸2基、土壙、旧河道、奈良時代の井戸1基、奈良～平安時代にかけての溝や多数の柱穴がみつかりました。このうち、調査区の西端でみつかった古墳時代の土壙からは完全な形の土師器の甕と高坏の坏部が1点ずつみつかりました。この土壙は直径1m、深さ1mの規模で、古墳時代の旧河道の底に掘られていました。土壙内に埋まっていた土は木の葉や自然木が大量に混じったもので、その上には板や自然木がまるで蓋をするように覆っていました。こうした状態から祭祀（祭り）に関係した遺構ではないかと思われます。このほか奈良時代の井戸からは墨書土器3点とヘラ描き土器1点がみつかりました。土器に書（描）かれている文字は現在検討中ですが、「家」と読める文字が含まれており、注目されます。

(小島)



2. 酒寺遺跡

(第35次調査)



調査地 播磨田町字平成の里3076-2
 調査面積 約 300 m²
 調査期間 9月29日～10月20日
 調査実施の理由 店舗建築

今回の調査地点は、播磨田町の南端で下之郷町に接しています。周囲の道路は以前に調査されており、この時3条の大きな溝が発見されています。今回の調査ではこの内の1条の溝の続きがみつき、その規模は幅3.5～4 m、深さ約1.2m程で、調査区の端から端まで約20mにわたっていました。この溝の断面を観察した結果、まず弥生時代中期後半の段階に掘られ、有機質土層（植物がたくさんまった層）が堆積していて、その後、この溝が埋まり弥生時代後期にもう一度掘り直され、多量の土器とともに再び埋まったようです。重要な発見としては、中期後半の有機質土層中より、黒漆を塗った木製の弓と赤色顔料を塗った盾の破片がほぼ同じ場所からみつかったことです。この遺構が下之郷遺跡の環壕と思われることから、環壕はムラを守るためにあり、弓と盾はムラを襲う者たちと戦うために持っていたことが想像できます。それは、弥生時代に戦争があったことを物語っているといえるでしょう。 (佐々木)

3. 下長遺跡 (第14次調査)

調査地	大門町字盆瀬坊323-1番地
調査面積	約 2,054 m ²
調査期間	4月24日～9月30日
調査実施の理由	工場用地造成

乙貞81号でお知らせしました下長遺跡の調査は、9月末で終了しました。前回には縄文時代中期末頃の竪穴住居の可能性のある遺構を検出しましたが、調査の結果は、住居として使われた可能性は大変低いものと考えられ、中から生活の匂いがするものはほとんど出土しませんでした。みつかった石鏃も流れこんだものと思われま。調査区を北側に広げて調査を進めましたが、縄文時代の集落は明確ではありませんでした。なお、地下約1.5mまで掘り下げると、砂が約10cmの幅で帯状に続くのが確認されました。これは土層を確認したところ、下の砂が盛り上がっていて地震による噴砂であることがわかりました。噴砂は、震度5以上もある強い地震でないと発生しないといわれていますが、この検出された噴砂は縄文時代中期末以前（4000年以上前）のものと思われま。 (山崎)

4. 下長遺跡 (第15次調査)

調査地	古高町字池之田477-15番地
-----	-----------------

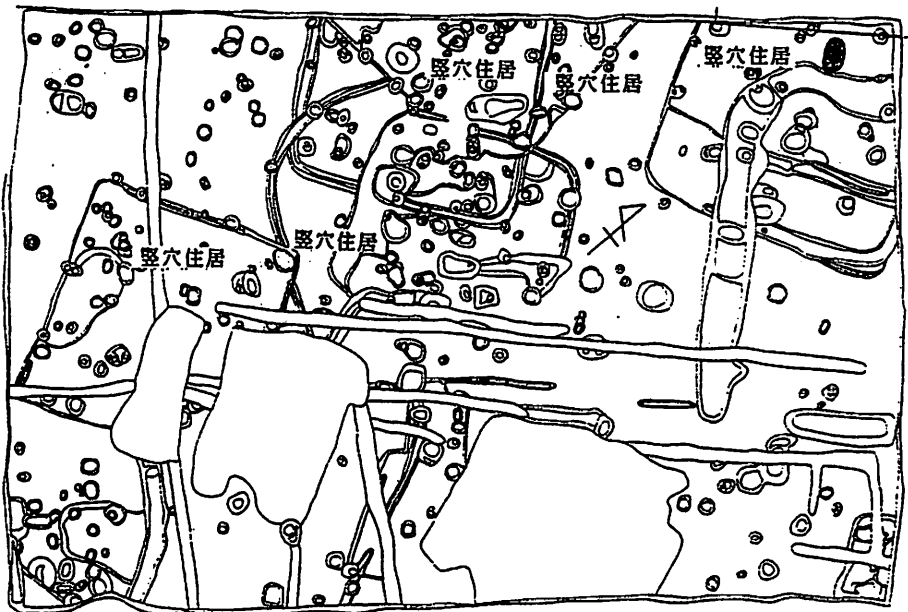
調査面積 約 550 m²

調査期間 7月17日～9月27日

調査実施の理由 工場建設

今回の調査地は下長遺跡の東端にあたり、弥生時代から古墳時代にかけての墓域である塚之越遺跡とは隣接する地点にあたります。この調査では弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての方形竪穴住居10棟以上をはじめ、古墳時代前期の溝や多数の柱穴、それに鎌倉時代の柱穴と井戸、小溝がみつかりました。竪穴住居は一辺5～6mの規模で、屋根を支える柱や周壁溝（排水用とみられる壁際に掘られた小溝）、炉などが住居内からみつかりました。竪穴住居はいずれも重複

して検出されていることから、数回の建て替えが行なわれていると考えられます。今回の調査により、かなりの遺構密度で遺跡が広がっていることがわかりました。（小島）



5. 塚之越遺跡 (第9次調査)

調査地 古高町字正業

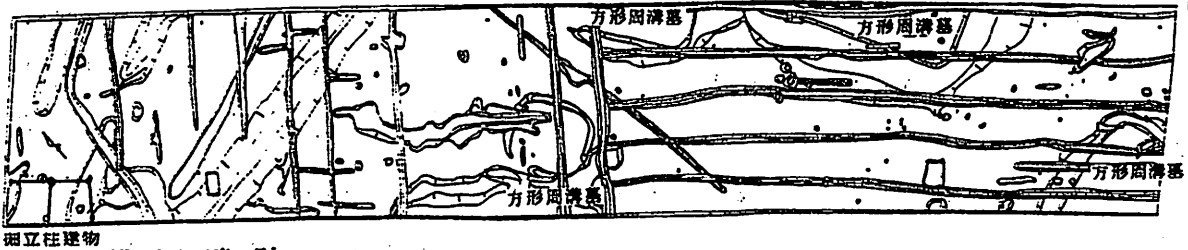
調査面積 約 600 m²

調査期間 9月11日～10月31日

調査実施の理由 共同住宅建築

塚之越遺跡の調査は予定通り終了しました。今回の調査では、耕作遺構、土壇溝、掘立柱建物1棟（1間×2間以上）、方形周溝墓4基などがみつかりました。周溝墓の溝からは壺・甕・鉢などが壊れた状態でみつかり、時期は弥生時代後期から古墳時代初め頃のものと思われます。今回の調査地は8月に現地説明

会を行なった場所（乙貞82号参照）から100m南の地点にあたり、この場所まで墓域（お墓が築かれている範囲のこと）が続いていることがわかりました。（藤原）

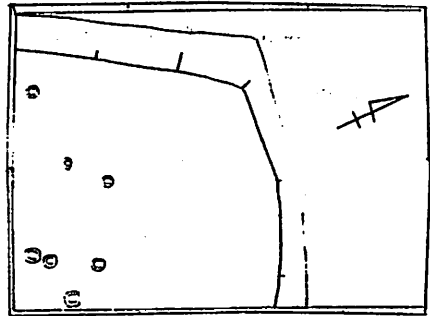


6. 横江遺跡

調査地 横江町字高内164-1番地
 調査面積 約 100 m²
 調査期間 10月26日～10月27日
 調査実施の理由 個人住宅建築



横江遺跡は鎌倉～室町時代の大きな集落跡として知られている遺跡で、周辺は欲賀遺跡や大門遺跡など、とりわけ中世の集落遺跡が集中している地域です。今回の調査地は横江遺跡のほぼ東端にあたる地点です。ここからは鎌倉時代の屋敷地の一部とその周りを巡るとみられる溝がみつかりました。溝や柱穴からは土師器小皿と黒色土器碗の破片が少量出土しました。（嶋）



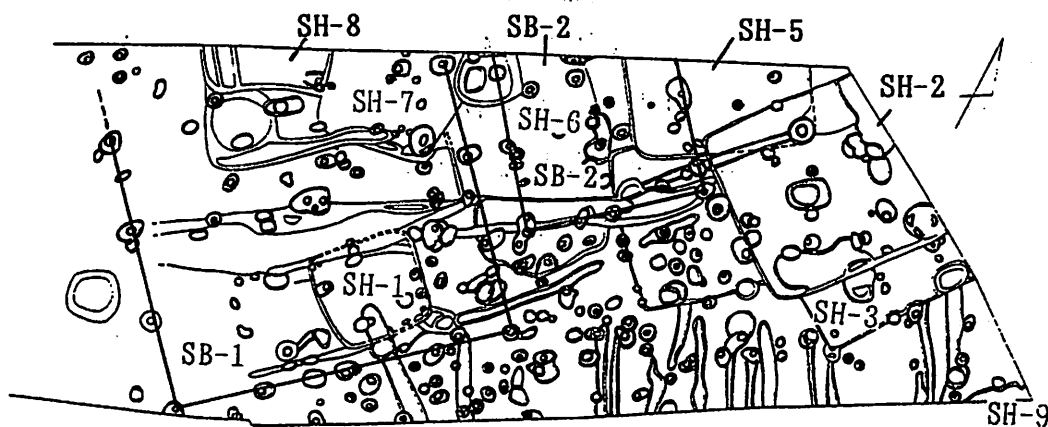
7. 吉身北遺跡

調査地 勝部町字松塚422-5番地他
 調査面積 約 1,305 m²
 調査期間 8月1日～11月30日
 調査実施の理由 都市計画道路勝部・吉身線道路改良工事

今回は東側の調査区（T-2）の調査結果について報告します。T-2からは竪穴住居（SH-1～9）と掘立柱建物2棟（SB-1・2）の他、多数の土壇、溝がみつかりました。これらの遺構はT-1調査区（調査区の西端）でみつかった遺構と同じく、大まかに3時期に区分することができます。9棟の竪穴住居は古墳時代後期（6世紀前半）に営まれた住居でSD-1はその後の遺構ですが、同じく古墳時代後期のものと思われます。また2棟の掘立柱建物は、時期が大きく降り、平

安時代のもと考えられます。まず竪穴住居は、いずれも方形住居で、9棟みつ
 かっており、少しずつ場所をずらして建て替えられたため、重複が著しい状況で
 す。規模のわかる住居のうち、SH-2は一辺約5mでいちばん大きく、逆にSH-1が
 最小の規模の2.9mで残りの住居は4m代の規模です。床面からは柱穴の他、東辺
 にカマド、東南隅に土壇（貯蔵穴）がみつかっていて、守山駅周辺でこれまでみ
 つかっている同時期の住居とほぼ同じ造りであることがわかりました。次に平安
 時代の掘立柱建物が同じ方位で2棟みつかっています。建物は調査区外に広がる
 ため規模が明確ではありませんが、ほぼ屋敷の中心を調査したようです。みつ
 かった建物は現状の規模から母屋に当たり、その周辺には副屋や井戸等を備えてい
 るものと考えられます。また、平安時代の掘立柱建物に伴う土壇や柱穴からは、
 土師器、施釉陶器、黒色土器などが多量に出土しています。今回の調査により、
 守山駅を中心とする吉身北遺跡の竪穴住居集落が当地にまで広がり、古墳時代の
 巨大集落であることが再確認されました。

(岩崎)



8. 吉身西遺跡 (第67次調査)

調査地 守山町字下ヌケ田
 調査面積 約 1,350 m²
 調査期間 8月7日～9月7日
 調査実施の理由 共同住宅・店舗建築

今回の調査は市役所から郵便局に向かう道路と警察署前の道路の交差点の西角
 で行ないました。2カ所の調査区からは古墳時代中期の旧河道が現れ、縄文時代
 晩期や古墳時代後期の土器、木器がみつかりました。この旧河道は市役所の西に

あるサンライフ守山の建築に先立つ調査でも検出されており、サンライフから北へ流れ、今回の調査地からさらに西へ流れるものと予想されます。その先は農林省滋賀食糧事務所の西から守山高校のグラウンド西端あたりに向うものと考えられます。旧河道は幅約20m、深さ2mで底は砂や礫です。みつかった土器から古墳時代中期には埋没し始め、後期（6世紀）には埋まったところが水田として使われています。なお、旧河道の底には大小の差はありますが、直径1～2mの土壙が幾つも見つかりました。土壙の用途は明確ではありませんが、その内の一つから小型の壺が1点出土しました。（山崎）

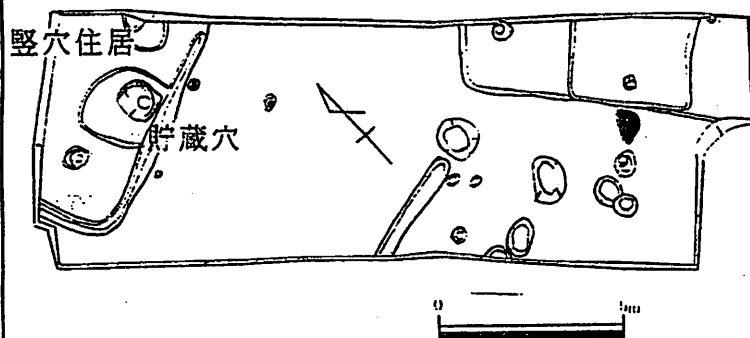
9. 吉身西遺跡 （第68次調査）

調査地 下之郷町字八作720-2
 調査面積 約 800 m²
 調査期間 9月14日～11月2日
 調査実施の理由 倉庫付事務所建設

今回は吉身西遺跡の北端にあたる地点で調査を行ないました。その結果、耕作痕と溝4条、土壙、柱穴などがみつかりました。また調査区の南西側は旧河道となり、落ち込んでいました。溝は古墳時代前期のものが3条と平安時代後期のものが1条ありました。旧河道も含めてこれらの溝は南北方向にのびており、南から北へ流れていたようです。（木村）

10. 吉身西遺跡 （第69次調査）

調査地 守山町字南下道田139-4番地
 調査面積 約 100 m²
 調査期間 11月9日～11月16日
 調査実施の理由 個人住宅建築



今回の調査は、守山市立図書館の西方約100mの地点で行ないました。その結果、弥生時代後期の竪穴住居1棟と縄文時代と考えられるピットなどがみつかりました。

竪穴住居は一辺約7mの方形住居と考えられ、壁際に周壁溝、南辺中央部に貯蔵穴とみられる土壇が掘られていました。この住居は隣接地の竪穴住居群とほぼ同じ構造であり、当時の住居建築にあたって、ある種のきまりが存在した可能性が考えられます。(小島)

SSS SSS SSS 調査中 SSS SSS SSS

11. ニノ畦・横枕遺跡 (第27次調査)

調査地 下之郷町字向八代1-1番地
調査面積 約 2,100 m²
調査期間 6月15日～12月20日(予定)
調査実施の理由 店舗建築

ニノ畦・横枕遺跡はこれまでの調査から、弥生時代から古墳時代にかけての複合遺跡であることがわかっています。今回の調査では大きく分けると、弥生時代中期末頃の集落遺構・弥生時代後期～古墳時代初頭にかけての周溝墓群・古墳時代後期の水田跡の三時期の遺構がみつかりました。今回は集落遺構と周溝墓群について紹介します。まず集落遺構についてですが、当調査地はニノ畦・横枕遺跡の環壕集落内の東端で、昭和58年に野洲町側でみつかった二条の環壕の隣接部分にあたります。当時の調査とその後の調査成果から、二条のうち内側のものが今回の調査地へのびて、集落の内側を区画する内郭になるのではと予想されていました。しかしその延長部分を確認した結果、環壕は内側へ少し入ったところで途切れていて、内側を区画する溝とはなりません。調査ではこれまでのところ、竪穴住居が12棟、井戸が4基以上、土壇が多数みつかっています。円形竪穴住居は直径が9m前後で中央にはすり鉢状の土壇があり、その周囲を4本の柱で支えるタイプが多く、方形竪穴住居はそれよりやや小さく、地べたで火を焚いた痕跡があり、支柱穴の位置が判然としないものが多いようです。また、出入口と思われる施設が、その内の3棟で確認されました。いずれも南もしくは南東側に向いていて、採光や風向きのことを弥生人が十分に配慮して住居を築いていたことがうかがえます。次に周溝墓群の調査についてですが、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての方形周溝墓を5基検出しています。5基のうちの1基は一辺(台状部)が19mを超える巨大なものです。(川畑)

12. 欲賀南遺跡 (第3次調査)
 調査地 欲賀町上高座
 調査面積 約 3,000 m²
 調査期間 7月1日～12月28日(予定)
 調査実施の理由 ほ場整備事業

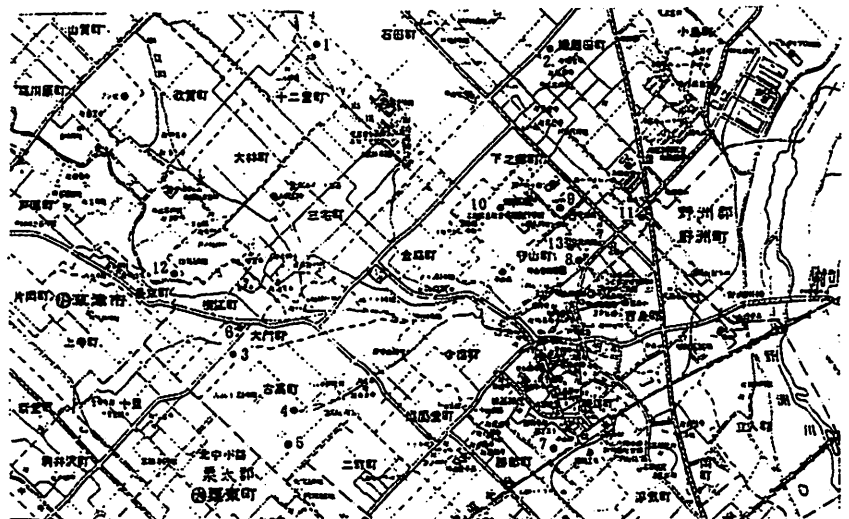
ほ場整備事業に伴う調査も最終調査区に入りました。この調査区では古墳時代前期と後期の溝がそれぞれ1条と、14世紀後半の溝・土壇・ピット等を検出しています。このうち土壇の一つは、長辺が1.5m、短辺が0.8m前後の長方形で、土壇墓と考えられます。また、直径約10mの池状遺構もみつかっており、中央部分から信楽焼の甕が出土しています。時期は16世紀後半から17世紀前半のものと思われる。(畑本)

13. 吉身西遺跡 (第70次調査)
 調査地 守山町510番地
 調査面積 約 3,000 m²
 調査期間 11月1日～平成8年3月(予定)
 調査実施の理由 市民病院建築

市民病院新築に伴い、市民病院の西側駐車場を調査しています。これまでに古墳時代前期の竪穴住居や土壇、古墳時代後期の土壇などがみつかっています。これまでの近接地の調査でも古墳時代の集落跡がみつかっており、今回検出された遺構もこの集落の一部と考えられます。(小島)

〔調査位置図〕

1. 赤野井遺跡
2. 酒寺遺跡
3. 下長遺跡
4. 下長遺跡
5. 城之越遺跡
6. 横江遺跡
7. 吉身北遺跡
8. 吉身西遺跡
9. 吉身西遺跡
10. 吉身西遺跡
11. 二の畦・横枕遺跡
12. 欲賀南遺跡
13. 吉身西遺跡



☆ 文化財調査の窓 ☆

【楽しく考古学】

『埋蔵文化財』という言葉よりも『考古学』あるいは『遺跡』と呼んだほうが親しみやすいかもしれない。そこで、この分野を楽しく学ぶ、あるいは調査することに紙面をいただく。私事になるが、夏の日よりも、冬の寒い日の方が嫌いである。また年齢が増すごとに寒暖が身に堪えるようになってきている。このような時楽しく仕事に関わらないとやっておれなくなる。どのような楽しみを持っているかという、今までに付近で調査した成果が今回行なう調査とどのように関係するのか、また出土品ではどのような差があるかなどを考えながら、今まで発見されていないような物や跡を密かに探しているのである。昭和60年に調査を行っていた吉身西遺跡（成人病センター前）で方形周溝墓と言う墓が幾つも見つかったが、調査を進めていくと、幅約1 mほどの空間が残る状況となった。この状況を理解するのに墓道（墓へ通じる道のこと）を設定すると、この道の両側に墓が規則的に造られていることがわかった。この後、市内ではこの例（二列並行）が幾つも検出されることになり、弥生時代の墓の造り方に規則のある事がわかったのである。今後の課題は更にこの規則の意義を説き明かしていくことであり今も検討できる機会があればと手ぐすねを引いている。つまり、現場にこそ担当者の活躍できる場所があるわけで、事務的に処理をしては楽しくない。どのような場所に住居や井戸跡があり、墓はここにあるべきだと想定して初めて楽しくなる。機械のように掘って図面を描いても、生きた資料にはならない。どのような分野においても歴史があるわけで、その歴史を振り返ることなしには進歩がないと言われている。考古学の歴史を学び、現状を把握し、調査に生かすことを心に刻みたいものである。

初めて、あるいは少し遺跡に触れた、またこれから考古学に入門される場合はどのような接し方が良いのだろう。例をあげると、一つの事柄に限定して見る、聞く、読むのも方法であると思う。また時代を限ってみるのもよい。更にいろいろな場所に出かけてみるのもひとつである。最も良いのは他の人が全く触れていない事柄を扱うことであり、それは興味を深める早道だといえる。何事にも深く入るのには楽しくやるしかないのではないかと思う。